

親和動機のあり方から見た自己愛傾向と対人恐怖傾向¹⁾

川崎直樹²⁾

筑波大学大学院人間総合科学研究科

小玉正博

筑波大学心理学系

我が国における臨床的議論の中では、自己愛人格と対人恐怖の背景に共通した心理的プロセスがあることが示唆されている。こうした議論を元に、本研究では他者と親和する上での動機づけのあり方に焦点をあて、自己愛傾向及び対人恐怖傾向との関連を検討した。大学生299名に質問紙調査を行い、自己愛傾向、対人恐怖傾向とともに、4側面の親和動機が測定された。その結果、楽しさなどのポジティブな刺激と外的な評価を求めて他者と接する傾向が自己愛傾向に影響することが示された。一方で、ポジティブな刺激は求めずとも、他者からの是認や外的な評価を求める傾向が対人恐怖傾向に関与していることが示された。これらの結果から、自己愛人格と対人恐怖の背景にある心理的プロセスの共通点や相違点が議論された。

キーワード：自己愛，対人恐怖，親和動機，自尊心

問題と目的

近年、我が国では、自己愛という概念が頻繁に取り上げられ、凶悪犯罪（大淵，2003）、ひきこもり（鱸，2002）、バーチャル世界への没入（細井，2000）など、現代社会に見られる様々な問題を理解するためのキーワードとして用いられている。特に臨床心理学・性格心理学の分野では、対人恐怖と自己愛の関連性が注目されている。臨床的指摘（北西，1998；岡野，1998；鈴木，2004）や実証的研究（福井，2001；小塩，2002；清水・海塚，2002）が蓄積されてきており、重要な研究テーマの1つとなっている。

そもそも自己愛という概念は、包括的には“自己像を一貫性、安定性、肯定的情緒の彩りがあるものとして維持しようとする機能”として理解さ

れる（Stolorow, 1975）。ここで言う自己愛は、誰もが有する一般的な心理的機能と言える。しかし、自己像を安定した肯定的価値のあるものとして形成しようとするそのプロセスに偏りや異常がある場合、それは自己愛の障害と呼ばれる（Kernberg, 1998; Ronningstam, 2005）。

自己愛の障害の典型としては、DSM-IV（American Psychiatric Association, 1994）などにある自己愛人格障害が挙げられる。この障害の主たる特徴は、非現実的に理想化された誇大な自己概念を有しており、賞賛されたいという欲求が強く、尊大で傲慢な認知・行動様式をとることにある。その表面的な適応は良好であることも少なくないが、他者への共感性に乏しく自己中心的・自己顕示的なふるまいが顕著であるため、人間関係に問題を呈することが多いとされる（Kernberg, 1975; Milton, 1998；小此木，1981）。

一方、主に本邦において自己愛の問題と関連してしばしば議論されるのが、対人恐怖である（北西，1998；三好，1970；鍋田，1997；西園，1970；岡野，1998；Tatara，1993）。これらの議

1) 研究の方向性に関して日頃から貴重なご意見を頂いている筑波大学心理学系の杉江征先生に、心より御礼申し上げます。また、貴重なご示唆を頂きました審査員の先生方に厚く御礼申し上げます。

2) 現所属：北翔大学人間福祉学部

論の多くは、対人恐怖の背景に“誇大”（北西, 1998 ; Tatara, 1993）, “理想的”（西園, 1970 ; 鍋田, 1997 ; 岡野, 1998）, “空想的”（三好, 1970）などと表現されるような非現実的な自己像が存在することを指摘している。非現実的な自己像と、現実における自己の姿との乖離が知覚されることで、対人恐怖的な羞恥感や恐怖がもたらされるとされる（北西, 1998 ; 三好, 1970 ; 鍋田, 1997 ; 西園, 1970 ; 岡野, 1998; Tatara, 1993）。そして、こうした非現実的な自己概念を保持しているという点で、対人恐怖と自己愛人格には類似した人格構造があるとの指摘がなされている（岡野, 1998 ; 北西, 1998）³⁾。

しかし、誇大性が前面に出ており他者に対して自己中心的な振る舞いを示す自己愛人格障害と、他者からの評価に敏感で抑制的なふるまいをしがちである対人恐怖とでは、その表面的特徴は対照的である（岡野, 1998）。量的研究においても、自己愛人格傾向の尺度と対人恐怖（対人不安）傾向の尺度が全体的に負の関連を示すことが報告されている（清水・海塚, 2002 ; 小塩, 2002; Watson & Biderman, 1993）。つまり、臨床的には自己愛人格も対人恐怖も“自己愛の障害”を背景として生まれる問題として理解されているが、実際の外面的特徴や尺度項目に表れる両者の特徴は対照的なものになっているのである。

以上のことから、自己愛と対人恐怖についての臨床的指摘を実証的に検討するためには、“自己

愛の障害”を反映した変数を設定し、自己愛人格の特徴と対人恐怖の特徴との関連を検討する必要があると考えられる。これまでの自己愛と対人恐怖に関する実証的研究では、こうした枠組みからの検討はなされておらず、自己愛人格の特徴と対人恐怖の特徴との並存性を示す試み（小塩, 2002 ; 清水・海塚, 2002）や、両者の直接的な関連を検討する試み（福井, 2001）が行われるに留まっている。そこで本研究では、両者の共通の背景構造である“自己愛の障害”の特徴を端的に表した変数を設定し、自己愛人格の特徴と対人恐怖の特徴との関連を検討することとする。

自己愛の障害を測定可能な概念として捉え直す上では、近年の性格・社会心理学における自己愛人格のモデル (Morf & Rhodewalt, 2001; Sedikides, Campbell, Reeder, Elliot, & Gregg, 2002) が有用な枠組みを提供すると考えられる。これらのモデルの中では特に、対人関係上の目的や動機づけの偏りが、自己愛人格を特徴づけていることが指摘されている。Morf & Rhodewalt (2001) は、自己愛人格を、「誇大な自己概念の維持」を最も上位の目的とする自己制御プロセスとして理解している。この自己制御プロセスの中では、他者と親密な関係を築くという目的は相対的に下位に位置づけられてしまう。そのため、他者との関係性を損なっても自己高揚的な認知や行動がとられるようになると指摘されている。また、Sedikides et al. (2002) は、自己愛人格者の自己高揚的な振る舞いは、“‘他者は自分のために存在している’ 幻想 (‘the other exist for me’ illusion)” から生まれると指摘している。自己愛人格者にとっての“他者”は、自己高揚のための手段に過ぎず、そのため他者とのつながりを犠牲にしても、自己の優越性が追求されると理解されている。

こうした見解は、自己愛人格者が誇大自己を維持するために自己の依存性を否定し、他者を脱価値化してみなしがちであるとの臨床的指摘 (Kernberg, 1998) とも符合している部分があると考えら

3) これらの議論は、自己愛人格障害に自己中心的で鈍感なタイプと、他者からの評価に過敏で自己消去的なタイプとがあるとする議論 (Gabbard, 1989; Broucek, 1982) とも対応して論じられている（北西, 1998 ; 岡野, 1998）。鈍感なタイプが DSM-IV (American Psychiatric Association, 1994) にあるような典型的自己愛人格に、過敏なタイプが対人恐怖に類似しているとされる。両タイプの共通点としても、非現実的・理想的な自己像の存在が指摘されており（北西, 1998 ; 岡野, 1998）、対人恐怖と自己愛の議論と符合すると考えられる。

れる。自己愛人格者の傲慢で尊大な臨床像は、自己高揚のみを求め、他者との良好な関係を形成することへは動機づけられていないことから表れる特徴として理解できるのである。

そして、この“他者と接する上で何を求めるか”という対人関係上の動機づけの観点から、対人恐怖についても検討を行うことで、両者の心理的プロセスの共通点について示唆が得られると考えられる。対人恐怖と自己愛人格は、非現実的な自己像を有し、それに固執している点で共通性があるとされる(岡野, 1998; 北西, 1998)。したがって、対人恐怖的な種々の特徴もまた、自己愛人格と同様に、非現実的な自己概念の維持を目的とするがゆえに他者と接する上での動機づけが偏ることから生まれる問題として理解できる部分があると考えられる。他者と接する上での動機づけのあり方に注目し、自己愛傾向及び対人恐怖傾向との関連について検討を行うことで、両者を共通の枠組みで理解するための有益な示唆が得られると考えられるのである。

なお、こうした他者と接する上での目的や動機づけのあり方について体系的に検討する上では、Hill (1987) の親和動機に関する研究が有効な視点を提供すると考えられる。彼は、人が他者と親和する動機は単一の目的によるものではなく、いくつかの異なる目的から生まれるものであると指摘している。そして多様な先行研究の概観から、人が他者と親和する動機を「情緒的支持」・「ポジティブな刺激」・「注目」・「社会的比較」という4つの社会的報酬に由来するものとして整理している。彼はこの枠組みに基づいて対人志向性尺度 (interpersonal orientation scale) を作成し、因子分析などによってその構造を検討することで、他者と親和する動機がこの4つの下位側面から測定できることを示している。

これまでの研究では、自己愛人格と勢力・優越性への欲求が正の相関関係にある一方で、親和欲求とは負の相関関係もしくは無相関であるという

知見 (Carrol, 1987; Raskin & Terry, 1988; Sturman, 2000) はあるが、親和動機の下位側面を細分化しての検討はなされていない。同じく対人恐怖に関しても、こうした親和動機の下位側面からの検討はなされていない。そこで本研究では、Hill (1987) の観点に従い、親和動機の下位側面のあり方から、自己愛人格的な特徴を有する傾向(以下、自己愛傾向と呼ぶ)と対人恐怖的な特徴を有する傾向(以下、対人恐怖傾向と呼ぶ)について検討を加えることとする。どのような動機づけが両傾向に共通した関連を示し、どのような動機づけが両傾向に異なる関連を示すのかを検討し、両傾向の背景となる心理的プロセスの相違点や共通点について議論することを目的とする。

なお、自己愛傾向の測定尺度としては、Narcissistic Personality Inventory (NPI; Raskin & Hall, 1979) が最も一般的に使用されている(小塩, 2004)。しかしこのNPIは、人格の障害の程度を測定するはずの尺度であるにも関わらず、精神的に健康な状態を示す指標と正の関連を示すという矛盾点が指摘されている(Campbell, 2001)。そうした点に対処すべく、近年では、NPIの分析の際に自尊心尺度を統制変数として用いる手法が勧められており(Brown & Zeigler-Hill, 2004; Paulhus, 2001)、NPIの持つ健康的な特徴の多くが自尊心によって説明されることが明らかにされている(Rose, 2002; Sedikides, Ruduch, Gregg, Kumashiro, & Rusbult, 2004)。そこで本研究では、統制変数に適しているとの指摘(Brown & Zeigler-Hill, 2004)を受けているRosenberg (1965) の自尊心尺度を用い、統計的な統制を行った分析を追加的に行うことで、自己愛人格の特徴をより明確に示すことを試みることにする。

方 法

調査時期 2003年9月上旬に調査を実施した。

調査対象 茨城県内の国立大学の学生299名(男性105名、女性194名)を対象とした。平均

年齢は19.8歳 ($SD=1.47$) であった。

手続き 講義時間後に質問紙への回答を依頼し、一斉配布・回収した。その際、質問紙への回答は義務ではない点、回答を拒否した場合でも不利益がない点を口頭及びフェイスシートにて教示した。

調査内容 (1) 親和動機：親和動機を下位目的ごとに測定する Hill (1987) の Interpersonal Orientation Scale の邦訳版である親和動機尺度 (岡島, 1988) の全26項目を用いた。“まったく違う (1)” から “まったくそのとおりだと思う (5)” の5件法で回答を求めた。なお、Hill (1987) と岡島 (1988) では因子負荷パターンが若干異なるため、本研究では再度因子構造を確認した上で下位尺度を構成することとした。

(2) 対人恐怖傾向：堀井・小川 (1997) の対人恐怖心性尺度を用いた。この尺度は対人恐怖的な悩みを表す6下位尺度「自分や他人が気になる悩み」(例：“他人が自分をどのように思っているのかととても不安になる”), 「集団に溶け込めない悩み」(例：“グループでのつき合いが苦手である”), 「社会的場面で当惑する悩み」(例：“人がたくさんいるところでは気恥ずかしくて話せない”), 「目が気になる悩み」(例：“人の目を見るのがとてもつらい”), 「自分を統制できない悩み」(例：“計画を立てても実行がとまなわない”), 「生きることに疲れている悩み」(例：“いつも頭が重い”) からなる。各下位尺度5項目、全30項目である。“全然あてはまらない (1)” から “非常にあてはまる (7)” の7件法で回答を求めた。

(3) 自己愛傾向：Raskin & Hall (1979) の NPI を元に作成された小塩 (1998) の自己愛人格目録短縮版を用いた。「優越感・有能感」(例：“私は、周りの人達より、優れた才能を持っていると思う”, “私は、周りの人が学ぶだけの値打ちのある長所を持っている”), 「注目・賞賛欲求」(例：“私は、みんなの人気者になりたいと思っている”, “私には、みんなの注目を集めてみたいという気

持ちがある”), 「自己主張性」(例：“私は、自己主張が強いほうだと思う”, “私はどんな時でも、周りを気にせずに自分の好きなように振舞っている”) の3下位尺度からなる。各下位尺度10項目、全30項目である。“まったくあてはまらない (1)” から “とてもよくあてはまる (5)” の5件法で回答を求めた。

(4) 自尊心：Rosenberg (1965) が作成し、山本・松井・山成 (1982) が邦訳した自尊感情尺度 (例：“少なくとも人並みには、価値のある人間である”, “自分に対して肯定的である”) を用いた。この尺度は自分自身に対するこれでよい (good enough) という感覚の程度を測定するものである。全10項目から先行研究 (佐久間・無藤, 2003) にならって項目8 (“もっと自分自身を尊敬できるようにになりたい”) を除いた9項目を用いた。“あてはまらない (1)” から “あてはまる (5)” の5件法で回答を求めた。

結 果

親和動機尺度の検討 親和動機尺度に因子分析 (主因子法, プロマックス回転) を行った。Hill (1987) と同様に、負荷量が.29以上を示した項目を採用することとした。その結果、全ての項目が採用され、Table 1 に示したような因子負荷パターンが確認された。第1因子及び第2因子には、Hill (1987) とほぼ同様の項目が高い負荷量を示した。第1因子は、辛いときに他者からの情緒的な支えを求める傾向として「情緒的支持」因子、第2因子は人と接することの楽しさや満足感を求める傾向として「ポジティブな刺激」因子と、Hill (1987) と同様に命名した。第3因子については、“私の存在価値を認め、大切に思ってくれる人のそばにいたい” といった項目の負荷量が高く、Hill (1987) の「注目」因子に類似していたが、他に“好感を持てる人と友達になれると非常に満足する”, “2,3人の人と非常に親密な友情を持てれば、満足である” といった項目の負荷量も高かったた

Table 1 対人志向性尺度の因子分析結果 (N=299)

		F1	F2	F3	F4	h^2
1	物事がうまくいかない時、人と一緒にいることが一番の慰めになる	.82	.10	-.14	-.13	.60
9	自分にとってとても大切なことがうまくできなかつたとき、人と一緒にいることで気持ちがまぎれる	.73	-.05	-.04	.09	.51
23	気持ちが動転して（混乱して）いるとき、誰かにそばにいて欲しい	.70	-.18	.16	-.05	.49
4	何か悪いことがあったり、壁にぶち当たった時はいつでも、親しく、信頼できるひとと一緒にいたい	.64	.03	.12	-.11	.49
17	悲しいときや落ち込んでいるとき、自分の周囲にいる人に慰めてもらおうとする	.59	.01	-.01	.17	.45
2	一人で仕事をするよりは、人と一緒にいたい。自分がどれくらいうまくできているかわかるからである	.52	.15	-.22	.09	.29
15	つらいことをしなければいけないとき、誰かが一緒にいてくれることが救いとなる	.47	.02	.21	.10	.46
11	私は、他者と一緒にいることで多くの人が感じる以上に満足がえられる	.22	.71	-.13	.04	.65
26	人を見ていたり、人を理解したりすることは楽しみの一つである	-.24	.66	.08	.12	.38
6	私は、他者と触れあうことによって人並以上に満足がえられる	.28	.61	-.09	-.05	.56
3	人と一緒にいることで素晴らしいのは、自分が活気に満ちて生き生きとするからである	.10	.54	-.01	-.13	.34
10	いろいろな人と一緒にいて、その人たちについて知ることは興味深い	-.08	.53	-.01	.06	.25
24	人のそばにいて、話を聞いたり、一对一の親しい関係を持つことが、私の楽しみである	.05	.38	.13	.03	.25
19	私の存在価値を認め、大切に思ってくれる人のそばにいたい	.07	.07	.63	-.01	.52
16	私らしさや私のすることに共感してくれる人のそばにいたいと強く思う	.22	-.05	.62	-.02	.56
25	好感を持てる人と友達になれると非常に満足する	-.09	.26	.49	-.03	.34
13	人と親密になれているとき、何か重要な事を成し遂げたような気がする	-.04	.21	.44	-.05	.27
21	まわりの人が私の存在に気づき、私らしさを認めてくれたらいいと思う	-.07	.23	.43	.07	.32
5	私に惹かれて、夢中になってくれる人と一緒にいたい	.20	.05	.40	-.09	.30
14	何が起きているのかわからないとき、自分と同じ体験をしている人と一緒にいたい	.21	-.09	.33	.14	.27
22	私をあまり肯定してくれない人と一緒にいたくない	.09	-.25	.31	.20	.19
20	2, 3人の人と非常に親密な友情を持てれば、満足である	-.13	-.09	.31	-.03	.06
7	自分がどれくらいうまくできているのかわからないとき、人と比較しがちである	.09	-.07	-.14	.78	.55
18	自分と比較するために人に注目することがある	-.12	.12	.05	.58	.36
8	私が注目的になれるときは、人と一緒にいたい	.08	.13	.16	.35	.30
12	仕事で、あるいは、別の場面で自分が何をよいかかわからないとき、手がかりとして人を見る	.00	.14	.03	.29	.14
		因子間相関 F1	—	.57	.62	.33
		F2	—	.46	.23	
		F3		—	.44	

め、他者からの肯定的な注目だけでなく、お互いを認め合う温かいつながりを求める傾向として解釈し、「是認」因子と命名した。第4因子は、“自分がどれくらいうまくできているのかわからないとき、人と比較しがちである”などの項目の負荷量が高く、Hill (1987)における「社会的比較」因子に類似していたが、“私が注目的になれるときは、人と一緒にいたい”という項目も含まれていることから、外的な基準による評価や関心を求める傾向とし、「外的評価」因子と命名した。

この因子分析の結果に基づいて構成した下位尺度ごとに合計得点を算出した。各下位尺度の平均値、標準偏差、Cronbachの α 係数についてはTable 2に示した。 α 係数は、外的評価においてやや低い値を示したが、許容できる範囲と考えられた。その他の尺度はいずれも十分な値を示しており、各尺度の内的一貫性の高さが確認された。

その他の尺度の処理 自己愛傾向、対人恐怖傾向、自尊心の各尺度については、まず尺度全体の合計得点を算出し、平均値、標準偏差、Cron-

Table 2 各変数の基礎統計量と相関係数 (N=288)

	M	SD	α 係数	1	2	3	4	5	6
1 情緒的支持	23.31	5.34	.84	—					
2 ポジティブな刺激	22.07	3.93	.79	.53**	—				
3 是認	35.17	4.30	.70	.57**	.44**	—			
4 外的評価	14.61	2.50	.61	.34**	.30**	.48**	—		
5 自己愛傾向	90.10	15.42	.90	.27**	.36**	.25**	.29**	—	
6 対人恐怖傾向	110.60	30.02	.94	-.03	-.25**	.12*	.17**	-.33**	—
7 自尊心	28.85	6.60	.85	.07	.21**	.04	-.09	.54**	-.67**

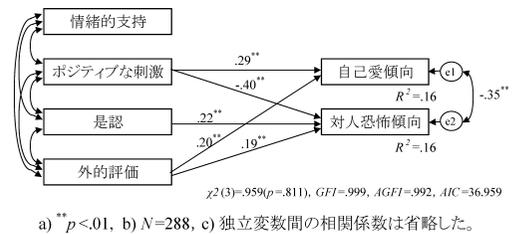
** $p < .01$, * $p < .05$

bach の α 係数, 各変数間の相関係数を算出し, Table2 に合わせて示した。 α 係数はいずれも十分な値を示しており, 各尺度の内の一貫性の高さが確認された。また, 対人恐怖傾向と自己愛傾向は, 先行研究 (清水・海塚, 2002 ; 小塩, 2002) と同様に負の関連を示し, 基本的に相反する特徴であることが確認された。

各得点の性差の検討 ここまでに示した各得点に, 性別による差が見られるかどうかを検討した。その結果, 自己愛傾向では男性の平均値 (93.24, $SD=16.44$) が, 女性の平均値 (88.41, $SD=14.61$) より有意に高いことが示された ($t(286)=2.56, p < .05$)。その他の得点には, 性別による有意な差は見られなかった。

各親和動機の自己愛傾向・対人恐怖傾向に対する影響 自己愛傾向・対人恐怖傾向に対してどういった親和動機が関与しているかを検討するため, 各親和動機を独立変数, 自己愛傾向及び対人恐怖傾向を従属変数とする多変量回帰モデルを構成し, 構造方程式モデリングにより検討を行うこととした。まず, 自己愛傾向の得点に性差が見られたことを考慮し, 男女間で各動機づけから両傾向への影響が異なるかどうかを多母集団同時分析によって比較した。その結果, 男女間で有意に異なる影響を示すパスは見られなかったため, 以下では男女全体で分析を行うこととした。

全体で1度目の分析を行い, そこで有意でなかったパスを全て同時に削除して再度分析した結



a) ** $p < .01$, b) $N=288$, c) 独立変数間の相関係数は省略した。

Figure 1 親和動機が自己愛傾向及び対人恐怖傾向に及ぼす影響 a) b) c)

果, 最終的に Figure 1 に示されるモデルを得た。Figure 1 にあるように, モデルの適合度はいずれも十分な値を示した。標準化偏回帰係数を見ると, 自己愛傾向に対しては, ポジティブな刺激と外的評価が正の影響を示していた。対人恐怖傾向については, 是認が正の影響, ポジティブな刺激が負の影響を示していた。また, 自己愛傾向と共通した結果として, 外的評価からの正の影響が見られていた。

自己愛傾向・対人恐怖傾向の下位側面に対する影響 上記の結果をより詳細に解釈するため, 自己愛傾向・対人恐怖傾向の各下位尺度の合計得点を算出した。これらの得点を従属変数, 各親和動機を独立変数とし, 一括投入法による重回帰分析を行った。また結果の比較のため, 自尊心に対しても同様の分析を行った。この分析結果を Table3 に示した。

自己愛傾向の下位側面については, 外的評価から注目・賞賛欲求への影響が比較的顕著であるこ

Table 3 親和動機による各変数の重回帰分析 (N=288)

従属変数	独立変数				R ²
	情緒的支持	ポジティブな刺激	是認	外的評価	
自己愛傾向					
優越感・有能感	.03	.31**	-.03	.03	.10**
注目・賞賛欲求	.04	.09	.11	.40**	.27**
自己主張性	.04	.20*	-.05	-.06	.04*
対人恐怖傾向					
自分や他人が気になる	.05	-.28**	.15*	.32**	.16**
集団に溶け込めない	-.07	-.41**	.25**	.07	.16**
社会的場面で当惑する	.01	-.27**	.18*	.07	.07**
目が気になる	.06	-.35**	.12	.10	.10**
自分が統制できない	-.06	-.10	.05	.19**	.04*
生きることに疲れている	.01	-.34**	.15	.15*	.11**
自尊心	-.02	.26**	.02	-.17*	.07**

***p*<.01, **p*<.05**Table 4** 自尊心を統制した自己愛傾向の階層的重回帰分析 (N=288)

従属変数		独立変数					R ²	R ² change
		自尊心	情緒的支持	ポジティブな刺激	是認	外的評価		
自己愛傾向全体	Step1	.54**					.29**	
	Step2	.53**	.07	.13*	.01	.27**	.43**	.14**
優越感・有能感	Step1	.67**					.45**	
	Step2	.65**	.05	.14**	-.04	.14**	.50**	.05**
注目・賞賛欲求	Step1	.13*					.02*	
	Step2	.15**	.05	.06	.11	.42**	.29**	.28**
自己主張性	Step1	.42**					.18**	
	Step2	.41**	.05	.09	-.06	.01	.19**	.01

***p*<.01, **p*<.05

とが示された。また、ポジティブな刺激からは、優越感・有能感及び自己主張性への影響が有意であった。

対人恐怖傾向については、ポジティブな刺激からの負の影響は下位側面ほぼ全体に見られた。是認からの影響は、主に自分や他人が気になる、集団に溶け込めない、社会的場面で当惑するなど、他者との関係性の中での悩みに関する側面で見られた。一方、外的評価からの影響は自分や他人が

気になる悩みの他、自分が統制できない、生きることに疲れているなどの側面にも見られた。

なお自尊心に対しては、ポジティブな刺激から正の影響が見られた他、他の結果とは異なり、外的評価からの負の影響が見られた。

自尊心を統制した上での自己愛傾向に関する検討 自己愛傾向の分析にあたり、自尊心の影響を統制した結果を得るため、階層的重回帰分析を行った。まず、第1ステップで自尊心のみを独立

変数として投入し、第2ステップで4つの親和動機を加えて投入した。自己愛傾向全体得点及び下位尺度得点について分析を行った結果をTable4に示した。自尊心の影響を統制する前に比べ、自己愛傾向全体に対するポジティブな刺激の影響は弱くなり、外的評価の影響は若干強くなっていた。ポジティブな刺激からの影響は、優越感・有能感、自己主張性いずれに対しても弱くなっていた。一方、外的評価については、優越感・有能感で正の影響が表れ、係数も有意となっていた。

考 察

以上の結果をふまえ、まず自己愛傾向と対人恐怖傾向に関する結果を比較し、その共通点や相違点などについて議論することとする。それを踏まえた上で、それぞれの傾向の下位側面についてなど、詳細な考察を行うこととする。

自己愛傾向と対人恐怖傾向との比較から

まず、対人恐怖傾向と自己愛傾向に共通した結果として、外的評価を求める動機からの正の影響が示された。このことから、自己愛人格と対人恐怖のいずれも、外的な評価や比較への関心の高さを背景として現れる特徴であると考えられる。こうした自己に関する外的な情報に関心を持つ傾向の背景には、臨床的に示唆されているような自己像の問題(岡野, 1998; 北西, 1998)があるとも考えられる。不安定で防衛的な自己概念を有しており、それを外的なフィードバックによって補償しようとする働きから、自己愛的な誇大性や自己顕示欲求、対人恐怖的な過敏性や評価懸念などが生まれている可能性が考えられる。

両者の相違点としては、まずポジティブな刺激が正負反対の影響を示していた点が挙げられる。自己愛傾向の高い者は、少なくとも短期的な付き合いの中では他者から優れた評価を受けやすいとされており(Paulhus, 1998)、他者からの賞賛などによりポジティブな感覚を得る機会が少なくないと考えられる。一方、対人恐怖者は他者との関係

性自体に困難を生じるため、不安や羞恥感などのネガティブな感覚を経験することが多いと考えられる。実際に他者から得ている反応や感覚が大きく異なることから、両者の外面的な特徴が対照的なものになっている部分もあると考えられよう。

また、対人恐怖傾向に対してのみ是認の影響が見られた点も両者の相違点として挙げられる。自己に関する評価への関心の強さを背景とする両者ではあるが、対人恐怖と自己愛人格とでは、他者に求める反応が若干異なるとも考えられる。自己愛人格を特徴づけるのは、他者との親密な関係性を重視せず、自己の優越性や有能性で自尊心を維持しようとする姿勢であるとされる(Kernberg, 1998; Morf & Rhodewalt, 2001)。それに対して対人恐怖を特徴づけるのは、他者からの期待に応えることで愛情や保護を受けようとする姿勢であるとされる(鍋田, 1997; 西園, 1970)。是認の尺度は、“私の存在価値を認め、大切に思ってくれる人のそばにいたい”といった項目からなる。これは、自己に愛情や保護を提供してくれる他者を求める傾向を表しているとも言え、上記の臨床的な指摘(鍋田, 1997; 西園, 1970)にも合致する部分があると考えられる。自己の有能性や優越性によってのみ自己価値を支えようとするプロセスから自己愛人格的特徴は顕著になり、一方他者からの愛情や保護によって自己価値を補償しようとするプロセスから対人恐怖の特徴が顕著になるという可能性が考えられる。他者からの保護や愛情がどの程度得られているかによって、対人恐怖傾向がどの程度顕著になるのかなど、今後詳細な検討が必要な点であると考えられる。

自己愛傾向の下位側面について

以上の全体的検討を踏まえ、以下では自己愛傾向の下位側面の分析や、自尊心を統制した分析の結果について、詳細な考察を加えることとする。

まず外的評価からの正の影響は、主に注目・賞賛欲求に対して顕著であった。また、特に自尊心が統制された場合、全体得点及び優越感・有能感

に対してより強い影響が示されていた。なお、自尊心に対する外的評価の影響は反対に負の値を示していた。これらのことから、外的な評価を求める動機づけは、自己に対する“これでよい(good enough)”(Rosenberg, 1965)という健康的な感覚ではなく、他者からの賞賛や比較に基づく自己愛人格特有の優越感につながると考えられる。

一方、ポジティブな刺激から自己愛傾向への正の影響は、自尊心が統制されることでやや減少していた。このことから、自己愛傾向に関与するポジティブな刺激と、自尊心に関与するポジティブな刺激とは、その内容が若干異なっていると考えられる。上記の考察とも考え合わせると、自己愛傾向と関連するポジティブな刺激には特に、外的な賞賛や比較によって得られる優越感など、自己高揚的な快の感覚が反映されていると考えられる。

情緒的支持と注目、重回帰分析においては有意な影響を示さなかった。これらの動機は、他者からの肯定的配慮や情緒的な慰撫などを求める動機づけを反映している。こうした結果からも、他者との親密な関係ではなく、外的な評価や比較による自己高揚の感覚を求める自己制御プロセスとして、自己愛人格が理解できることが示唆されていると考えられる。

対人恐怖傾向の下位側面について

対人恐怖傾向の下位側面に対しては、まずポジティブな刺激から全体的に負の影響が見られた。対人関係や社会生活に困難を感じる中で、他者と接する楽しさを求める動機が失われ、対人恐怖的な不安や苦痛が顕著になっていると考えられる。

また外的評価からの影響は、下位側面では特に自分や他人が気になる悩みに対して見られた。自己に関する外的な情報への関心が、そのまま他者からの評価に対する過敏さや懸念につながっていると考えられる。また外的評価は、自分が統制できない、生きることに疲れているといった、意思や意欲、気分に関する悩みにも影響していた。他者の評価を基準として生きる外発的な動機のあり

方によって、内発的な意思や意欲が損なわれ、気分も停滞していると考えられる。

一方是認からの正の影響は、集団に溶け込めない悩み、自分や他人が気になる悩み、社会的場面で当惑する悩みなどに対して見られた。これらは対人恐怖の下位側面の中でも、他者からの受け容れに関する懸念や困難と関連していること。したがって、自己の存在価値を補償してくれる他者を求める傾向が対人恐怖に寄与しているという見解を支持する結果であると考えられる。ただし、情緒的支持から対人恐怖傾向には有意な影響は見られていない。このことから、自己の辛い体験を他者と共有してまで情緒的な接触を持つことには動機づけられていないと考えられる。これらの結果を考え合わせると、他者からの是認による自己価値の補償を求めながらも、実際の他者との情緒的接触には動機づけられておらず、そのため是認への欲求や動機が十分に満たされない状態にあることが、対人恐怖的な種々の特徴や悩みの背景となっている可能性が考えられる。こうした解釈の妥当性については、今後検討の必要があると言える。

まとめと課題

以上のように、“何を求めて他者と接するか”という親和動機のあり方について検討することによって、自己愛傾向及び対人恐怖傾向の背景にある心理のプロセスについていくつかの示唆が得られた。それらは臨床的な指摘ともある程度の整合性を持っていたと考えられる。特に本研究は、精神力動論的な理論を参照しながらモデルを設定し、実証的・数量的な検討を試みたものである。精神力動論と認知・社会心理学的な理論の統合は、近年の重要な研究課題の1つであるとされている(Westen & Heim, 2003)。本研究も、こうした試みの1つとして位置づけられると考えられる。

しかしながら本研究にはいくつかの限界もあると考えられる。まず、本研究では動機づけが自己

愛傾向と対人恐怖傾向を説明するという因果モデルを仮定していたが、実際のデータは同時点に測定された自己記入式質問紙であった。また、分析の結果得られた係数も統計的に有意ではあっても、両傾向を説明するモデルとしては十分とは言い難い値がほとんどであった。そのため、本研究で得られた知見をより頑健なものとするためには、今後、実験的手法や縦断的調査などを用いたさらなる検討が必要であると考えられる。

また、本研究では動機づけを中心概念として検討を行ったが、その動機が具体的にどのような行動として現れるかという点については検討されていない。今後は、動機づけのような内的プロセスだけではなく、他者との関わり方などの対人的なプロセスについても検討を重ねることで、本研究の知見はより有意義なものになっていくと考えられる。そうした検討を蓄積していくことによって、“自己愛の障害”を包括的に理解するための理論モデルの構築と検証を行うことが、今後の大きな課題であると言える。

引用文献

- American Psychiatric Association. (1994). *Diagnostic and statistical manual of mental disorder*. 4th ed.: *DSM-IV*. American Psychiatric Association.
- Broucek, F. J. (1982). Shame and its relationship to early narcissistic developments. *International Journal of Psychoanalysis*, **63**, 369–378.
- Brown, R. P., & Zeigler-Hill, V. (2004). Narcissism and the non-equivalence of self-esteem measures: A matter of dominance? *Journal of Research in Personality*, **38**, 585–592.
- Campbell, W. K. (2001). Is narcissism really so bad? *Psychological Inquiry*, **12**, 214–215.
- Carrol, L. (1987). A study of narcissism, affiliation, intimacy, and power motives among students in business administration. *Psychological Reports*, **61**, 355–388.
- 福井康之 (2001). 新しく出現したタイプを含む対人恐怖の質問紙調査による分類の試み 心理臨床学研究, **19**, 477–488.
- Gabbard, G. O. (1989). Two types of narcissistic personality disorder. *Bulletin of the Menninger Clinic*, **53**, 527–532.
- Hill, C. A. (1987). Affiliation motivation: People who need people ...but in different ways. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 1008–1018.
- 堀井俊章・小川捷之 (1997). 対人恐怖心性尺度の作成 上智大学心理学年報, **20**, 55–65.
- 細井啓子 (2000). ナルシズム——自分を愛するって悪いこと?——サイエンス社
- Kernberg, O. F. (1975). *Borderline conditions and pathological narcissism*. London: Jason Aronson.
- Kernberg, O. F. (1998). Pathological narcissism and narcissistic personality disorder: Theoretical background and diagnostic classification. In E. F. Rönningstam (Ed.), *Disorders of narcissism: Diagnostic, clinical, and empirical implications*. Washington, DC: American Psychiatric Association. pp. 29–51.
- 北西憲二 (1998). 自己意識過剰——対人不安——こころの科学, **82**, 37–41.
- Millon, T. (1998). DSM narcissistic personality disorder: Historical reflections and future directions. In E. F. Rönningstam (Ed.), *Disorders of narcissism: Diagnostic, clinical, and empirical implications*. Washington, DC: American Psychiatric Association. pp. 75–101.
- 三好郁男 (1970). 対人恐怖症について——「うぬぼれ」の精神病理——精神医学, **12**, 389–394.
- Morf, C. C., & Rhodewalt, F. (2001). Unraveling the paradoxes of narcissism: A dynamic self-regulatory processing model. *Psychological Inquiry*, **12**, 177–196.
- 鍋田泰孝 (1997). 対人恐怖・醜形恐怖——「他者を恐れ・自らを嫌悪する病」の心理と病理——金剛出版
- 西園昌久 (1970). 対人恐怖の精神分析 精神医学 **12**, 375–381.
- 大淵憲一 (2003). 満たされない自己愛——現代人の心理と葛藤——筑摩書房
- 岡島京子 (1988). 親和動機測定尺度の作成 日本教育心理学会第30回総会発表論文集, 864–865.
- 岡野憲一郎 (1998). 恥と自己愛の精神分析——対人恐怖から差別論まで——岩崎学術出版社
- 小此木啓吾 (1981). 自己愛人間 朝日出版社
- 小塩真司 (1998). 自己愛傾向に関する一研究——性役割との関連——名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), **45**, 45–53.
- 小塩真司 (2002). 自己愛傾向によって青年を分類する試み 教育心理学研究, **50**, 261–270.
- 小塩真司 (2004). 自己愛の青年心理学 ナカニシヤ出

- 版
- Paulhus, D. L. (1998). Interpersonal and intrapsychic adaptiveness of trait self-enhancement: A mixed blessing? *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 1197–1208.
- Paulhus, D. L. (2001). Normal narcissism: Two minimalist accounts. *Psychological Inquiry*, **12**, 228–230.
- Raskin, R., & Hall, C. S. (1979). A narcissistic personality inventory. *Psychological Reports*, **45**, 590.
- Raskin, R., & Terry, H. (1988). A principal-component analysis of the narcissistic personality inventory and further evidence of its construct validity. *Journal of Personality and Social Psychology*, **53**, 66–80.
- Ronningstam, E. F. (2005). *Identifying and understanding the narcissistic personality*. New York: Oxford University Press.
- Rose, P. (2002). The happy and unhappy faces of narcissism. *Personality and Individual Differences*, **33**, 379–391.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. New Jersey: Princeton University Press.
- 佐久間路子・無藤 隆 (2003). 大学生における関係的自己の可変性と自尊感情との関連 教育心理学研究, **51**, 33–42.
- Sedikides, C., Campbell, W. K., Reeder, G. D., Elliot, A. J., & Gregg, A. P. (2002). Do others bring out the worst in narcissist?: The “Other exist for me” illusion. In Y. Kashima, M. Foddy & M. J. Platow (Eds.), *Self and identity: Personal, social, and symbolic*. NJ: Lawrence Erlbaum Associates Inc. pp. 103–124.
- Sedikides, C., Ruduch, E. A., Gregg, A. P., Kumashiro, M., & Rusbult, C. (2004). Are narcissists psychologically healthy?: Self esteem matters. *Journal of Personality and Social Psychology*, **87**, 400–416.
- 清水健司・海塚敏郎 (2002). 青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の関連 教育心理学研究, **50**, 54–64.
- Stolorow, R. D. (1975). Toward a functional definition of narcissism. *International Journal of Psycho-Analysis*, **56**, 179–185.
- Sturman, T. S. (2000). The motivational foundation and behavioral expression of three narcissistic styles. *Social Behavior and Personality*, **28**, 393–408.
- 鈴木康之 (2004). 対人恐怖と自己愛の障害 上地雄一郎・宮下一博 (編著) もろい青少年の心——自己愛の障害・発達臨床心理学的考察—— 北大路書房 pp. 74–81.
- Tatara, M. (1993). Patterns of narcissism in Japan. In J. Fiscalini and A. Grey (Eds.), *Narcissism and interpersonal self*. New York: Columbia University Press. pp. 223–237.
- 鑑 幹八郎 (2002). 恥とナルチズム——ひきこもりについて—— 教育と医学, **50**, 679–686.
- Watson, P. J., & Biderman, M. D. (1993). Narcissistic personality inventory factors, splitting, and self-consciousness. *Journal of Personality Assessment*, **61**, 41–57.
- Westen, D. & Heim, A. K. (2003). Disturbance of self and identity in personality disorders. In M. R. Leary, & J. P. Tangney (Eds.) *Handbook of self & identity*. New York: Guilford Press. pp. 693–664.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64–68.
— 2006. 5. 18 受稿, 2006. 12. 12 受理—

Narcissistic Personality, Social Phobia, and Needs for Affiliation

Naoki KAWASAKI¹ and Masahiro KODAMA²

¹Doctoral Program in Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba

²Institute of Psychology, University of Tsukuba

THE JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 2007, Vol. 15, No. 3, 301–312

Previous clinical research has suggested that narcissistic personality and social phobia had common psychological factors and processes. In this research, we conceptualized needs for affiliation as interpersonal orientation, and commonalities and differences between narcissistic personality and social phobia were examined in terms of four different aspects of interpersonal orientation. Two hundreds and ninety nine (299) undergraduates completed a questionnaire, to measure four aspects of interpersonal orientation, narcissistic personality, social phobia, and self-esteem. Results indicated that needs for external evaluation and positive stimulation each had a positive correlation with narcissistic tendency. On the other hand, need for positive stimulation had a negative and need for social approval and external evaluation a positive correlation with social phobic tendency. From these results, along with correlations between subscales of the personality measures, commonalities and differences between narcissistic personality and social phobia were discussed.

Key words: narcissism, social phobia, needs for affiliation, self-esteem